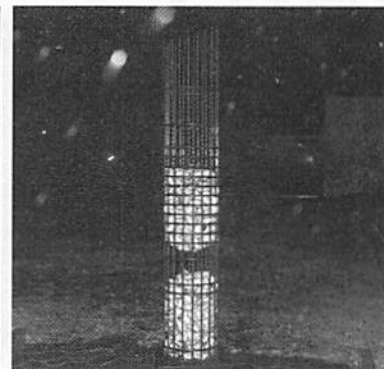
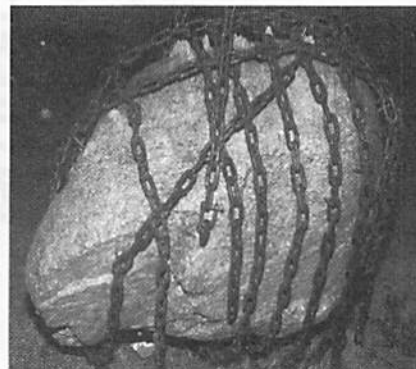




西山のカスケ。

〔写真〕「発見」をテーマに鏡をつかった作風から、紙や粘土、石や岩に素材の転換を図った作品の数々。テーマは、存在と無常感。美しく磨き込み永遠のフォルムを求めるのは、一種、彫刻の定番作業だといわれるが、別の地平を求めていくSUSIEEの時の経過と共に風化してゆくまま、変化を通じて、逆にその作品が内在する永続性や恒常性を語りつつける。それが主張だ。



もつと地域に密着した作品をつくりたい。
夢は、街のあちらこちらに作品を展示すること。
もつともつと、

人々の暮らしに溶け込んだアート表現。
それを追求したいのです。

彫刻家

〔KASUKE KISHI〕

貴志カスケ



「きしよしふみ」とよむ。だが、周囲の者は誰も本名を呼ばない。カスケさん。

どこでも通っている。変わっているのは通称だけではない。トレードマークは作業衣。その姿、初対面の人には、すしこワイイ印象を与えるかも知れない。で、その容貌は……

以前、某ウイスキーメーカーがウーロン茶の広告でマル顔の奇妙な仙人の絵を使っていたことがある。いささか失礼ではあるが、新聞広告ではじめてそれを見た瞬間、思い浮べてしまったのがカスケ氏

の顔であった。

ひとたび笑うと色白の頬に赤みがさして、目が京の童人形のように細くなる。語り口はやわらかい。やさしい人なのである。それとも案外、人見知りするタチなのだろうか。

一九五二年、和歌山生まれ。今年で四十二才になる。京都市立芸術大学美術学部では彫刻科に籍を置いた。卒業後は漫画家を目指して東京へ。もともと中学生の頃から漫画家志望だったという。以来、貧乏でシブリアなアシスタント生活を約二年。徒弟制度に耐えら

れなくなった青年カスケ氏は、いつの間にか京都にもどってきた。

当時、彼は左京区岩倉上倉町・通称“犬山”に居をかまえていた。丸太つくりのアトリエはどかな自然の中、なかなか異彩を放つものだったらしい。先輩から百本の丸太を譲り受け、すべて自分でつくりあげたという。彫刻で暮らしをゆこう。そう決意したカスケ氏だったが、カスキを食べる創作活動はできない。生活のために彼が着手したのは、博物館に展示されるさまざまなレプリカを製造することだった。芸大OBでこ

の仕事に携わる人から情報を得ての判断だ。彫刻や絵画を学んできた者にとっては、最も得意とする分野のひとつである。

ずいぶん前のことになるが、仕事の様子をまちかで見える機会を得た。そのときは、野尻湖博物館に設置する原寸大のナウマン像やレリーフが制作されていた。粘土で原型をつくり、ガラスウールをポリマール（液体樹脂）で貼りつけてゆく。ポリマールには硬化剤が混ぜてあるので、やがて粘土のゾウさんは、カチカチの樹脂でぐるまれてしまう。こ

の樹脂をはがせば「雛型」が完成内側をシリコン等で加工、ふたたびガラスウールとポリマールを雛型の内側に張りつければ、巨大な樹脂製のナウマン像が完成する。

この製法で、小さなものから大きなものまで、いろんなものをつくりることができた。が、ひとりで制作するには限度がある。そこで五人の芸大OBと京都・西山の頂上に移った。現在、カスケ氏が率いる制作工房、“アートユニオン”の誕生である。前述のゾウさんづくりも、もちろんここで行なわれた光景だった。

アートユニオンの誕生後、カスケ氏の周囲に噂を聞いた後輩たちが徐々に

集まりはじめた。当時、彫刻や絵画だけでは食べられなかった男たちは大学の講師などに就きながら、ここでアルバイトに精を出し、自分の作品づくりに没頭することができた。

そんな状況の中、後輩たちと共に、カスケ氏も数多くの作品を創作している。以前は「発見」をテーマに鏡をつかった作品が多かったが、現在は紙や粘土、石や岩をつかったものが多い。「存在と無常感」。それが今のテーマである。美しく磨き込まれ永遠のフォルムを誇示しつつけるモノには興味がない。時の経過と共に風化してゆくさま・変化を通して、逆にその作品が内在する永続性や恒常性を語りたいのだ

PROFILE

制作工房・ART UNION代表。本名は貴志佳史。カスケの由来は病弱だった幼年時代、丈夫に育つようにと両親が「嘉介」と別名をつけたのがはじまり。中学の教師がそれをカスケと呼んで以来、その名で通っている。大学卒業以降、約二年の期間を除き、京都での生活がつづく。和歌山県和歌山市出身の四十二才。夫人は画家で、ご本人は彫刻家の芸術一家。自宅や自宅周辺には、ふたりの作品も多数展示されている。現在、「夜景と濃霧」で知る人ぞ知る、大江沓掛町内・西山山頂に在住。

という。京展ではこれまでに市長賞や須田賞を受賞、グループ展活動も活発だ。最近では日米彫刻展やグループ展「8人の彫刻展」で作品を発表した。

好きだった漫画をあきらめ、京都にもどった理由。当人はそれを「挫折したんや」と語る。十年くらい前、工房の片隅に、ほこりまみれで置いてあった数枚の絵をみつけたことがある。アシスタント時代に描いたものか、繊細なタッチで民家の屋根が描写してあった。この人に未練、という言葉は似合わないが、ひよっとしてあの絵はまだどこか埃を被っているのだろうか。「もつと

地域に密着した作品をつくりたい。夢は、街のあちらこちらに作品を展示す

ること。モノユメントよりも、もつと人々の暮らしに溶け込んだアート表現を追求したい。作風がかわることはあってもカスケ氏は一貫してこの姿勢を崩そうとはしない。かつて、漫画というカタチで自己表現にこだわった青春時代。その想いの残像は、どうやらそんな創作姿勢に変貌を遂げたようだ。

氏の求めゆく「別の地平」に存在するのは芸術家だけが住む特殊な世界ではない。そこに広がるのは、あくまで氏自身が暮らす町と、そこに住む人々なのである。
文・三村 溪
写真・大田 メグミ